

地方における高齢者と若者の共生コミュニティの作成

A12

宮城県仙台第三高等学校

晩近、日本では少子高齢化を背景に、保育園などの子ども用の施設と高齢者の介護施設が一体となった「幼老複合施設」(幼老宅所)の需要が高まりつつある。私たちはこのような施設を地方の住宅街に建設し、施設に移る人・空いた住宅に新しく移住してくる人といった「人の循環」をつくり、過疎化・高齢化を防ぐことを目指した。

本論文は、幼老複合施設のメリットを生かし、かつ地域社会の拠点としての施設のあり方を明らかにしようとするものである。そのためにまず、少子高齢化社会における問題点を簡単にまとめるとともに、幼老複合施設によってそれらの問題をどのように解決できるのかを明示する(1.背景)。次に、幼老複合施設の概要を簡単に紹介し、幼老複合施設について、三高生と先生方にアンケート調査を行う。(2.調査方法)そして、アンケート結果を提示するとともに昨今の幼老複合施設に見られる傾向を説明する。(3.結果と考察)最後に、これらを踏まえて、上記の問いに対する答えとして、子どもと高齢者にとって心地よい生活の場となり、さらに少子高齢化社会における持続可能な地域社会の拠点となる幼老複合施設のあり方をハード面から考察する(4.考察)。

1 背景

近年、日本を含め多くの国々で少子高齢化が深刻になっている。特に日本は国際的に見てもその進行が著しく、社会保障や医療、介護にとどまらず様々な面でその課題が浮き彫りとなっている。内閣府による高齢者の一人暮らしに関する調査によると(表1)、昭和55年から平成27年にかけて高齢者の一人暮らし世帯は増加していることが分かる。(表2)

その中でも地方における影響は深刻で私たちが暮らす宮城県でも、過疎化・高齢化による高齢者の孤独死、空き家問題、地域コミュニティの機能低下など様々な問題を引き起こす。(表2)また、地方機能の低下によって保育所や幼稚園などの育児のための施設の不足なども問題になっており、核家族が増加している現代、子育てサービスの不足や待機児童問題は新たな住民の招致にも大きな壁となる。そこで私たちは地方におけるこのような問題の解決のためには「高齢者と若者の共生コミュニティ」が大きな役割を果たすのではないかと考えた。その中でも特

に現在広まりつつある、高齢者向け施設と子供・子育て向けの施設が併設された「幼老複合施設」というものに注目しその施設について追究した。

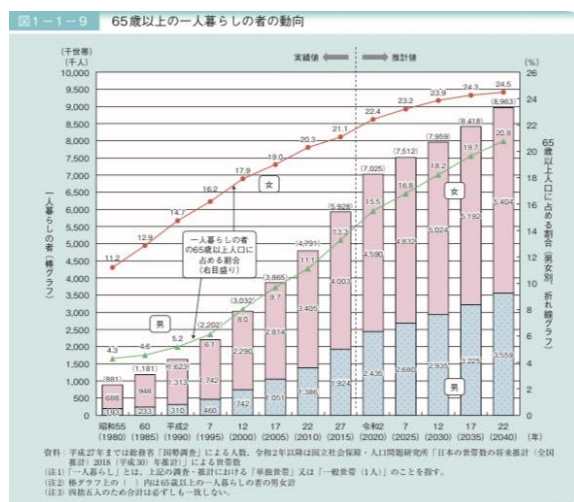


表1 65歳以上の一人暮らしの者の動向

図1-2-6-18

東京23区内における一人暮らしで65歳以上の人の自宅での死亡者数



表2 孤独死の増加

2 調査方法

私たちは幼老複合施設に着眼して対策を考えました。幼老複合施設とは「老人ホーム」などの高齢者用の施設や、「幼稚園」などの子供用の施設が合体している施設である。高齢者側のメリットとしては「表情が豊かになる」「体力の回復」「地域社会とのつながりが得られる」などが挙げられる。子供側は「挨拶やマナーを学べる」「高齢者への配慮ができるようになる」「コミュニケーション能力の向上」などが挙げられる。上記のメリットによって独居老人や待機児童の減少、それによる現役世代の介護や育児による負担の軽減が期待できる。高齢者の方が施設にうつることで住宅に空きができ、そこに若い世帯が移り住んでくるという「人の循環」によりその地域の高齢化、過疎化を防げるのではないかと考えた。デメリットは、「介護、保育両スタッフの確保が難しいこと」「スタッフの負担が大きいこと」「高齢者、子供の両者ともトラブルが多いこと」「感染症のリスクが高いこと」などである。これらのデメリットをなるべくカバーするため、私たちは大型施設を運営するのではなく、様々な施設が入った複合施設を想定し以下の調査方法をとった。第一に、三高生と三高の先生方へのアンケートを実施する。アンケートの内容は三高生と先生方で異なり、三高

生へは幼老複合施設の浸透度を確かめるため認知度について調査を行い、生産年齢にあたる先生方には、幼老複合施設の印象やもしも自分が高齢者向け居住施設に住むと仮定した場合、実際にあると便利な施設などを調査した。

第二に、施設の実例を調べ建物の規模や機能、子どもと高齢者との交流の工夫などを調査し、その傾向をまとめた。

3 結果と考察

1) アンケート結果

幼老複合施設の認知度を調査する三高生 119 人を対象にしたアンケートでは、およそ 9 割の人数から「知らない」という回答があり幼老複合施設の認知度が低く浸透しきっていない様子が伺えた。先生方からの回答については、施設についてプラスの印象を受ける人が多くいる一方、子どもが苦手などの理由からマイナスの意見を示す人もいることが判明した。併設してほしい施設については、私たちが想定していた病院などのほかに図書館などの娯楽施設を求める人が多いことがわかった。(円グラフ①～⑤)

【施設の規模・構造について】

- ・保育所<<高齢者居住施設
- ・施設の階数は 2-3 階が 6 割以上
- ・大きく分けて積層型、並置型、施設分棟型の 3 種類がある

【施設に必要な機能について】

- 立地 病院の近く
- 敷地 広い庭、ベンチ、植物、ミニ公園、診療所
- 建物 3 階建て、エレベーター、高齢者用の階段
- 3 階 保育園、交流スペース
- 2 階 高齢者用住居
- 1 階 超高齢者用住居

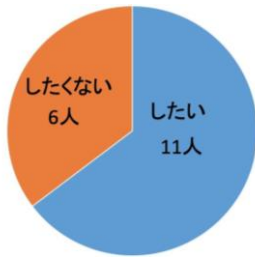
【子どもと高齢者の交流を生む工夫について】

- 計画的交流…「敬老の日」と「定期的な訪問」を中心に行われている

外部空間、施設敷地の外、文化継承のための交流

自然発生的交流…エントランス部分と食堂では、老人と幼児との交流が発生する機会が多い
 食堂→遊戯室や保育室の様子が見える配置

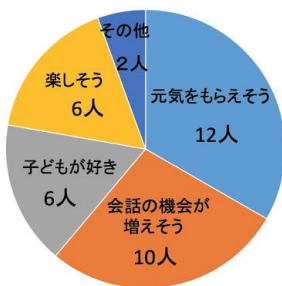
①老後に一人暮らしすることになったら、
 幼老複合施設に入居したいか



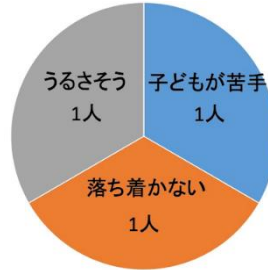
②その集合住宅に、子供のいる施設が併設されていることについて、どのような印象を受けるか。



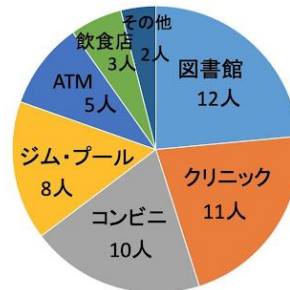
③(1)②で、いい印象と答えた理由
 (複数回答可)



③(2)②で、悪い印象と答えた理由
 (複数回答可)



④ほかにどのような施設が併設されていたらいいか。
 (複数回答可)



4 考察

(1) 幼老複合施設自体の認知度の低さが分かったため、今回の提案が一般に浸透するのは難しいと考えられる。しかし、限られた地域・年齢層の母集団であったため、少し高めの年代や地方部・都市部など幅広い地域の人を対象に行えばより正確な認知度が調査できるだろう。

(2) 半数以上が幼老複合施設について良い印象を持っていることが分かった。一方、悪い印象と答えた人のなかには「うるさそう」といった環境要因によるものの他に、「子どもが苦手」「落ち着かない」といった心理要因も見受けられた。また、施設に併設されていてほしい設備としては診療所などの他に、「図書館」「ジム・プール」といった娯楽を求める声が多いように見える。

(3) 感染症のリスクや高齢者と幼児のトラブルなどが考えられるため、積層型が最も最適だと考えた。計画的交流・自然的交流が図られる

ため、子を持つ親にとっては①挨拶やマナーが学べる。②高齢者への配慮を学べる。③コミュニケーション能力が上がる。④高齢者からしか得られない経験を獲得出来る。といったメリットがある。また、高齢者にとっては①表情が豊かになる。②体力の回復。③地域社会への繋がり。などのメリットがある。

→高齢者と幼児や若者の両者にとってメリットのある施設を目指しPRしていき、”高齡になったら施設に入居する”流れが浸透すれば、人の循環が生まれ、地方過疎を防げるだろう。

5.まとめ

以上のことから、幼老複合施設は、建設することで高齢者と子供の自然な交流に好影響を与え、最終的には加速する少子高齢化社会において、都市部でも地方にも重要な役割を果たすことができると考えられる。また、私たちが提案する幼老複合施設も、希薄化している地域社会での結びつきを高めるような役割が期待できる。しかし、現在流行している新型コロナウイルスの感染拡大のリスクなどを考慮すると、高齢者同士や、高齢者と子どもとを容易に接触させるのは大きな危険性が伴うのではないかと懸念もなされる。

今後の展望としては、アンケート結果や調査をもとに幼老複合施設の理想像を明確にするとともに、新しい生活様式に対応しながら、どのように地域社会を活性化させていくかなども考えていきたい。

【参考文献】

地域密着型特別養護老人ホーム アルテイル
宮町

社会福祉法人青葉福祉会

<http://aofuku.or.jp/elderlycare/armiyamachi>

幼老複合施設における異世代交流の取り組み

北村安樹子

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rt0308.tdf>

幼老複合施設の運用と世代間交流の実態に関する研究（6月29日現在記事存在せず）

<http://www.htues.kyushu-u.ac.jp/education/student/PDF/2015/2he14069K.pdf>